

## 《紹介》

村田真一著

### 『宇佐八幡神話言説の研究

#### ——『八幡宇佐宮御託宣集』を読む

『八幡宇佐宮御託宣集』（以下、「託宣集」）は、宇佐宮配下の諸神宮寺を統括する学頭であった僧・神吽の編述によって正和二年（一一三三）に成立した。その内容は、書名通り宇佐宮における八幡神からの託宣に関する記述を中心に、広く宇佐宮に関する記録や縁起、伝承、そして神吽による注釈などを含んでいる。

本書は、こうした「託宣集」を読み解くことで、その意味や価値を明らかにしようというものである。ただし、本書の目的は單に「託宣集」の示す信仰を解明するに留まらない。筆者は以下のようについて述べる。

神吽による「託宣集」の論述は、「託宣集」の主体者を、八幡神への信仰の可能態として、神吽以外の無限の他者に開くという宗教性の論理によって支えられているのである。（中略）「託宣集」を読み解くことは、中世の宗教世界について明らかにすることそのものであって、そこには、近代主義的で固定的な宗教観、託宣の古層的理義、神道と仏教の二分的認識、神仏習合・本地垂迹の構造等といった先入観には取り切らない八幡信仰の中世の広がりと深まりとが、望まれるようになるはずである。「託宣集」を読み解く、というこ

とは、結局は現代の歴史・宗教・神話の学がこれまで置き去りにしてきたような宗教的・神話的な命題についての、「託宣集」に独自な表現における発見にほかならない。

（緒言 一八〇二〇頁）

すなわち、本書は「託宣集」の読解を通じて、従来とは異なる新たな中世神仏信仰研究を打ち立てようというのである。ただし、「託宣集」を虚心に読み込む、といった態度を筆者は取らない。筆者は、「神話言説」という視座から「託宣集」の読解に迫るのである。

はたして、この「神話言説」とは何か。筆者は山本ひろ子や斎藤英喜らによる「中世神話」「中世神学」あるいは「現場論」といった方法論をうけた上で、「宗教実践としての中世神話・中世神学、つまり神話や神学の創造を含み込む當為」、より具体的には「祭祀職掌の創造と証明における神話・神学の生成」を「神話言説」と名指している（第一章七二一～七三頁）。筆者は託宣を「常に、神の顯現を感じ得するという宗教者による創造的行為であり、神の語り」という形で示された神話」だと述べている（第五章一二〇二一～一二〇三頁）。つまり、八幡神の託宣に代表される神話や注釈などに代表される編述者・神吽が構築する神学、さらに呪能、歌、儀礼次第などを記す記事が「託宣集」に含まれているからこそ、先の「神話言説」という視座から読み解く必要があるというのだ。

では、具体的に「託宣集」からどのような問題が顕わになるのか。殊に第五章から第九章に「託宣集」が示す中世八幡神の豊穣

なる信仰が解明されているのだが、紙幅の関係からここでは詳述できない。ただ、本書によつて「神話言説」研究という沃野が切り拓かれたことは間違ひなかろう。

（佛教大学研究叢書26 A5判五六一頁二〇一六年二月）

佛教大学「製作発売・法藏館」九八〇〇円+税

（鈴木耕太郎・高崎経済大学）

沼波政保著

## 中世仏教文学の思想

本書は、沼波政保氏の四十余年にわたる研究成果であり、三十本の論文をもとに構成されている。

序章には、「中世文学を底流するもの」として「人間への凝視、自己への凝視、我が心への凝視」（二五頁）が提示されている。これは本書全体を通じてのテーマであり、著者はその萌芽を、平安末期の戦乱・天災や社会の混乱を経て「無常觀が切実なものとして迫ってきた」（七頁）点に捉えている。また、「仏教文學」については、「仏教思想を根底に持つた人間の精神的營為が表れており、その仏教思想を根底に持つた精神的營為が享受者に感動を与えるもの」（三〇頁）と明確に定義する。著者の研究は「人間の心へと向かっていく」（あとがき・六一二頁）ものであり、著書名の「中世」「仏教」「文学」「思想」の各語に思いが込められていることを知る。以下、各章の概要を紹介する。

第三章「仏教説話の研究」は、「仏教説話の成立」「仏教説話における因果応報」「親を殺す話」の三節から成る。仏教説話が教理の裏打ちによって成立・成長するさまを論じるとともに、一般に仏教思想とされる因果応報を「人間の心の根底に存在する一つの考え方」（二三六頁）としても捉える視点を示している。

第四章「覺一本『平家物語』の研究」は十節、一八九頁から成る。覚一本の性格を、「単に諸行無常・盛者必衰の『ことはり』を語ろうとするのではなく、そのような無常の波の大きな流れに対して、懸命に抗いながらも、結局はその波に呑み込まれて行ってしまう人間に對して、限りないとおしさを感じ、同じ人間としてその魂を慰めようとする鎮魂歌である」（二七〇頁）と捉え、それを具体的に読み解いていく。

第五章「隠者文学の研究」は五節から成り、西行の和歌や長明の「方丈記」終章には自「己」を見つめ苦惱する姿を、兼好「徒然草」には無常觀のうえで人間性を肯定する考えを、捉え、論じる。

附篇「中世仏教文学の周縁」は、「中世文学にみる人間觀」「雅び」の崩壊と繼承」「狂言・諺語觀の展開」の三章から成り、「宇治拾遺物語」「建礼門院右京大夫集」「とはすがたり」などを仏教思想の観点から論じている。

本書は、人間を「凝視」した中世の人々とその心を、各作品の検討を積み重ねて「凝視」したものと言えよう。全編を通して読まれたい。

（A5判 六二三頁 二〇一七年七月）

法藏館 一万二〇〇〇円+税

（箕浦尚美・同朋大学）

第一章「撰集抄」の研究は五節から成る。「撰集抄」の特徴として、「発心・出家の説話中における位置、発心譚の増加、往生の説話中における扱われ方、往生の証明の減少といった点で、行業や積善・靈験・奇瑞等を述べる先の時代の説話と異なり、（略）「心」を重視する傾向が強くなっている」（四一頁）点を指摘し、作品の基調を成す「清僧意識」や構成を検討する。

第二章「中世仏教説話集の研究」は、「隠遁の思想的背景」「中世仏教説話と摩訶止觀」「民衆の中へ」「行基と空也」（副題略）の四節から成る。空也や玄賓と、行基との差を検討し、ひじりと呼ばれた人々が俗にありながらも清廉な身を希求したところに、中世の隠遁・陰徳の理想像があることを論じ、思想的背景として摩訶止觀を検討する。

第三章「仏教説話の研究」は、「仏教説話の成立」「仏教説話における因果応報」「親を殺す話」の三節から成る。仏教説話が教理の裏打ちによって成立・成長するさまを論じるとともに、一般に仏教思想とされる因果応報を「人間の心の根底に存在する一つの考え方」（二三六頁）としても捉える視点を示している。

第四章「覺一本『平家物語』の研究」は十節、一八九頁から成る。覚一本の性格を、「単に諸行無常・盛者必衰の『ことはり』を語ろうとするのではなく、そのような無常の波の大きな流れに対して、懸命に抗いながらも、結局はその波に呑み込まれて行ってしまう人間に對して、限りないとおしさを感じ、同じ人間としてその魂を慰めようとする鎮魂歌である」（二七〇頁）と捉え、それを具体的に読み解いていく。

「安然と済暹を中心に」・第四章「般若説經典における五相成身觀—安然説を中心にして」・第五章「五部心觀」の五相成身觀）、第三部「成仏論の形成」（第六章「済暹の密教行位説」・第七章「重譽における機根の問題」）、第四部「東密と南都教学」（第十章「大乘義章」の修学について—論義関連資料を中心にして）・第十一章「日本における大乘義章」の受容と展開・第十二章「中世における密教と諸思想の交流—珍海を中心にして」、付論「重譽撰『秘宗深密鈔』について」、終章、資料編（温泉寺藏「菩提心論開見抄」二卷・翻刻）・智積院藏「秘宗深密鈔」三卷・翻刻）

本書の特徴は、資料編に付された新出資料をはじめとする個別

資料の詳細な検討に基づき、台密・禪・南都教学（特に三論宗）との関連のなかで東密教学の発展を論じるところである。

第一部～第三部では、済暹をはじめとする院政期の東密僧の教學に台密の安然の説が大きく影響を与えていたことを指摘している。第一部では、中世東密の教主論、なかでも済暹の教説（第一章）と五種法身説の日本における受容と展開（第二章）を中心として議論を行っている。第二部では、「金剛頂經」系の代表的觀法である五相成身觀の日本における受容と展開について、済暹における五相成身觀と五智との関係（第三章）、般若説經典からの思想的展開（第四章）、円珍伝來の図像資料「五部心觀」の特徵と成立時期（第五章）をめぐって論じている。第三部では東密の行位

田戸大智著

## 『中世東密教学形成論』

本書は、二〇一〇年に田戸氏が早稲田大学に提出した博士論文に基づく著書である。

序章、第一部「教主論をめぐる問題」（第一章「済暹の教主義—安然説の受容」）・第二章「五種法身説の検討」、第二部「五相成身觀の考察」（第三章「五相成身觀の日本の展開

説における台密の影響を分析し、済暹が円仁説と安然説に依り思考を深めていること（第六章）、院政期の光明山寺僧重譽の成仏論において安然の教説も援用されていること（第七章）を明らかにしている。なお、重譽に関しては、付論で撰述書『秘宗深密鈔』について議論が行われ、資料編にその翻刻が収録されている。

第四部では、中世前期における東密と禪との関係を論じている。そのなかで、十三世紀成立の『菩提心論開見抄』（資料編に翻刻収録）を東密系の諸宗兼学・禪密一致を標榜した學僧の著作と位置づけ（第八章）、さらに「真禪融心義」との思想的共通性から高野山金剛三昧院（道範・真空・頼瑜等）の周辺で作成された可能性が高いことを指摘している（第九章）。

第五部では、南都教学と東密との関わりを修学の場に則して示している。まず、慧遠著作『大乘義章』についての論義資料を紹介して、院政期には東大寺だけでなく醍醐寺・仁和寺・勧修寺等の密教寺院で『大乘義章』が修学されていたことを指摘する（第十章）。さらに、その理由は寺院あるいは法会の場で『大乘義章』が三論宗の存在基盤となっていたこと（第十一章）、そして、その修学のなかで空海『十住心論』等の密教学の影響を受け理論化していたこと（第十二章）を指摘している。

本書は直接的に説話を扱うものではない。しかし、たとえば、「顯密禪教」（雜談集）を修めた無住について議論をする際に、当時の仏教学の研究や交流の状況を踏まえることは必要不可欠であろう（本誌五一号収録のシンポジウム「無住—その信仰の軌

跡」参照）。中世東密教学の思想展開を知るために、その最新の研究成果として貴重な本である。

(A5判 四六八頁 二〇一八年二月 法藏館 八〇〇〇円+税)  
(三好俊徳・名古屋大学)